

名大醫學部學友時報 2020 1

目 次

1. 新年のご挨拶	松尾 清一 (2)	3. 新春随想	坂本 純一 (8)
	門松 健治 (3)		河野 弘 (10)
	小寺 泰弘 (4)	4. 謹賀新年	 (11)
	勝野 雅央 (5)	5. 150 周年記念記事	中尾 昭公 (15)
2. 准教授就任	川嶋 啓揮 (6)		木山 博資 (15)
	高成 啓介 (7)	6. 新春後記	大野 欽司 (16)
			 (16)

謹 賀 新 年



新年のご挨拶



新年のご挨拶

名古屋大学総長 まつお せいいち
松尾 清一



新年明けましておめでとうございます。令和新時代での新年を迎えるにあたり、謹んで皆様にご挨拶を申し上げます。

現代社会は情報のデジタル化と知識情報駆動型の価値創造、そして科学技術の加速度的な進歩があいまって、かつてない規模とスピードで変化しています。米中二強時代にわが国が国際的に取るべきポジションはどうか、重要な問題です。これに加えてわが国では、人口問題がいよいよ深刻になっています。人口の高齢化や労働生産年齢人口の極端な減少、大学に関連していえば18歳人口の大幅な減少が、日本の未来に極めて深刻な影響を及ぼすことは多くの識者が認めているところです。経済成長は維持できるのか、労働生産性は向上させられるのか、人生100年時代に多くの国民はまっとうに生涯を終えられるのか、社会保障や医療・介護はどうなってゆくのか、等々多くの難しい課題を抱えて令和新時代の幕が開きました。

好むと好まざるとにかかわらず社会が激変する中で、当然、医療のカタチも大きく変化することは不可避です。我々はいったいどのような未来社会を想定し、そこでの医療の在り方はどうあるべきか明確な目標とビジョンを持ち、それに向かって教育・人材育成、研究・開発、国際交流、そして社会連携・産学連携を戦略的に進める必要があります。名古屋大学医学部、医学系研究科、そして関連諸組織は、医学医療をけん引するリーダーとして、また社会に貢献する国立大学として、困難な課題に挑戦し、未来を切り拓いてゆく責務がありますし、その覚悟が求められています。年の初めにあたり、私は皆さんと、「社会貢献の高い志を持って未来の医学医療を創るために果敢にチャレンジしてゆく自由闊達な精神と、それを全力で達成してゆく責任感」を共有したいと思います。

その上で、今の名古屋大学の医系全体のポテンシャルを考えてみたいと思います。昨年の大きな出来事として、5つほど挙げたいと思います。第一に、名古屋大学で3つ目となる卓越大学院プログラム「情報・生命医科学コンボリューション on グローカルアライアンス (CIBoG)」が採択され、治療から予防への転換をリー

ドする諸人材の育成をめざしてスタートしました。第二に、保健学科において2020年度から大学院の組織改編により医療情報学研究の強化を図ることが決定され、情報学と保健学との連携・融合が進むものと期待されます。第三には、鶴舞・大幸地区と東山地区の一層の連携強化が進められていることです。東山地区には創薬研究に関連した環境医学研究所や創薬科学研究科があり、保健体育科学センターも健康増進というテーマで活動しています。医工連携で共同研究を進めてきた工学研究科や情報学研究科も含め、領域を超えた融合研究で新しい価値創造を目指す動きが活発になっています。また、第四として、鶴舞地区に全学の学術産連本部の分室が正式に設置されることになり、産学連携をより包括的かつ戦略的に行えるよう支援体制を強化しました。さらに第五として、これら多様なアクティビティーを、戦略性をもって互いに連携しながら新しい医学・保健・医療の構築に向けた戦略とアクションプランを作る必要があり、大学本部と医学系研究科（病院含む）とのコミュニケーションをより密にして両者が連携して機能強化に取り組むことにしました。

これらに加えて、本年4月からは岐阜大学との法人統合により、東海国立大学機構が発足します。岐阜大学は本学が有していない獣医学科と動物病院を有し、大学構内には岐阜薬科大学があり、医・獣・薬の連携がなされています。名古屋大学のリソースと合わせることで、将来は国内有数の一大医学医療研究開発拠点へと発展する可能性があります。また、すでに糖鎖科学研究拠点や両大学附属病院の医療情報統合プロジェクトが始まっており、その成果が期待されるところです。医学部・研究科・病院同士の協議はこれからというところですが、ぜひ広い視野で両者の連携と協働を進めていただきたいと思いますし、本部としてもしっかりと支援をしたいと思っています。

令和の時代に、名古屋大学医学部・医学系研究科が日本と世界で輝けるような基盤を作り、その上に多くの成果が出せるよう、全員で頑張りましょう。



新年のご挨拶

名古屋大学医学部長・医学系研究科長

かどまつ

門松

けんじ

健治



新年あけましておめでとうございます。学友会の先生方にはよき初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は大きなイベントがたくさんありました。2月、附属病院は国際的な医療施設評価認証機関であるJCI (Joint Commission International) の認証を取得しました。国立大学附属病院としては初めての取得であり、大変なご苦勞もあったと思いますが大きなインパクトがありました。3月、石黒直樹病院長は退任され、4月、小寺泰弘先生が新しい病院長に就任されました。石黒先生は6年の任期を全うされたわけですが、メディカルITセンター (MIT)、JCI、臨床研究中核病院など今後の附属病院の向かうべき方向性を示し、大きな足跡を残されました。小寺先生には、高齢化が定着し日本の医療が転換点を迎えようとするこのタイミングでの舵取りは大変に難しいものがありますが、アカデミア附属病院のミッションと矜持を胸にリーダーシップを発揮していただきたいと願っております。

4月、齋藤英彦名誉教授を会頭とする日本医学会総会2019中部が開催されました。第30回の節目であり、名古屋では24年ぶりとなる総会でした。「医学と医療の深化と広がり～健康長寿社会の実現をめざして～」をメインテーマとして、3名のノーベル賞受賞者、本庶佑先生、山中伸弥先生、天野浩先生の講演をはじめ、医学の最前線から医療制度、国際化まで面白い講演と展示が目白押しでした。医学会会員、市民には予想を超える多くの来場をいただき、近年で最も充実した総会となりました。この総会を境に、時代は平成から令和へととなりました。改めて、学友会のみなさまのご協力とご支援に感謝申し上げます。そして齋藤先生、おめでとうございます。

10月、松尾清一総長が文部科学大臣から東海国立大学機構の初代機構長に指名されました。これによって、今年4月から発足する機構はいよいよ本格的な準備を加速しました。東海国立大学機構は名古屋大学と岐阜大学の統合による一法人化です。スケール感でいうと、京都大学と学生、教職員数では比肩するものとなります。ここで、この新法人の特徴は「地域に根差した世界トップ研究大学」ということになろうかと思えます。つまり、「地域」と「研究」の2つのキーワードが大事です。欧米の大学でもそうであるように、大学は地域によって支えられています。地域への還元を、町づくりへの貢献を、真

摯に考え実行する大学。これは本来あるべき姿です。一方、アカデミアの変わらぬミッションは先端研究を進め技術革新、社会革新に貢献することにあります。この「地域」と「研究」の両立は決して難しいものではなく、しかしその文化が根付いていない我が国で当たり前に行えることが東海国立大学機構の最大の魅力となるはずです。医学部にも医療情報統合、糖鎖研究推進など機構の柱となる課題が任されており、教育・研究の連携も含めて進めていきたいと思えます。

さて、2021年に我々は創基150周年を迎えます。ご存じのように「創基150周年医学部基盤整備支援事業」(<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/kikin/med-kikin-150/>)を立ち上げました。この基金は(1)100年経っても変わらぬ鶴舞キャンパスのアイデンティティを保つためのキャンパス整備、(2)動物実験施設整備、(3)名大医学部150年史編纂および記念集会、の3つに目的を絞っております。2022年までに期間を限った150周年のためだけのものです。目標総額10億円を目指しておりますが、お蔭様で既に凡そ8000万円の寄附をお寄せいただいております。幸先のいいスタートを切ることができました。また、学友会の先生方から「連帯感」を持たせるようなものを作れないかという提案をいただき、名古屋大学医学部オリジナルのネクタイ、スカーフを作成する予定です。本基金はまさに学友会の先生方によって支えられるものであります。何卒ご支援をよろしくお願い申し上げます。なお、以前よりご協力いただいている基金「医学系未来人材育成支援事業」は恒久的なものとして継続してまいります。

学友会の先生方には、今年も変わらぬ厚いご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げます。



新年のご挨拶

名古屋大学医学部附属病院長 こでら 小寺 やすひろ 泰弘



新年あけましておめでとうございます。学友会の先生方におかれましては、よき初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

わが国でメジャースポーツとまでは言い切れなかったラグビーのワールドカップをsecond tierの国として初めて開催した結果、民度の高さがにじみ出るようなおもてなしを自然体で行える日本人のすばらしさが参加国に高く評価されたことについて、大変誇らしく思いました。日本人の体格がこのハードな競技に向いているとは到底思えませんが、少なくとも日本人のメンタリティーは紳士的なふるまい、自己犠牲、相手への敬意などを重んじるこの競技の本質と極めて親和性が高いのだと思います。

この素晴らしい国が衰退することなどあってはならないと思います。しかし、楽観はできません。平成の30年間で産業構造や価値観の変化に伴い、世界企業時価総額ランキングの上位にひしめていたわが国の企業の多くは順位を大きく下げました。この間、少子化が進み、人口の年齢別分布が劇的に変わり、立ち行かなくなりつつある現在のわが国の負債が次世代に課せられようとしています。さらにグローバルな環境の変化から、わが国はここ数年相次ぐ災害にさらされ、ますます疲弊しています。こうした厳しい時代にわが国の医療や医学研究は削られるばかりの予算と、そもそも足りていないにもかかわらず働き方改革により今後は厳しい時間的制約も課せられることになる労働力によって担われることになります。

名古屋大学医学部附属病院（以下名大病院）は地域医療の最後の砦でありますので、経営上は採算の合わない診療においてもマンパワーや費用を投入する必要があります。また、臨床研究中核病院として、特定臨床研究や研究シーズ開発の支援など、アカデミアとしてきわめて重要ではあるが必ずしも収益が期待できない部門を有します。実地臨床においても名大病院はこうした複合的な要因があり、名大病院の財政状況は危機に瀕しておりますが、近年このような財政難は元来大型の研究費を獲得しやすいとされてきた中核的な国立大学附属病院においてより顕著になっているように思われます。ここ数年国策として提案・公募される新たなプロジェクトに応募し、そのために雇用や設備の拡充に奔走した結果何とか

採用していただいて面目を施すといったことを繰り返して来ましたが、このようなプロジェクトでは当初頂ける補助金が漸減しても多彩な職種の雇用に伴う人件費と事業費は自前で維持しなければならず、気が付くと経営上大きな負担になっていきます。名大病院ではさらに悪いことに、病棟が経年劣化をきたしており、可能であれば大規模な改装が望まれますが、現在の経営状況では到底まなまりません。このように名大病院は将来の見通しを立てるのが大変厳しい状況となっておりますが、天然資源に乏しく科学技術立国が叫ばれて久しいわが国のアカデミアにいる者として、ただ守りに入っているだけでは存在する意義がありません。というわけで、当院に課せられている最大の課題である安全かつ高度な医療の提供を日々実践する中で、何とか治験や特定臨床研究にも食らいついてしっかりした研究業績を上げることが出来るよう、多職種で力を合わせて頑張る所存です。

最後になりましたが、日本中の同業者からその動向を質問されながらなかなか十分に答えることができていなかった名古屋大学と岐阜大学の関係が、東海国立大学機構という形で具体化してまいりました。当面は両大学の特徴を生かせる研究課題の拠点形成や人材育成を中心に連携が進められるわけで、いきなり附属病院が統合されるわけではありません。とは言え、岐阜大学の吉田和弘病院長が消化器外科学の中でも同一の分野において共同研究を含め様々な活動を共に行ってきた盟友であることも何かの縁であろうと思われ、この機会にさらに連携を深めたいと考えております。

例年になく厳しい内容となってしまう、学友会の先生方にはご心配をおかけしていることと思います。ぜひご指導ご鞭撻を賜り、さらにご支援を賜りながら、精一杯努力をしてみたいと思います。本年も何卒よろしく願い申し上げます。



新年のご挨拶

時報部長 **勝野** かつの **雅央** まさひさ



新年、あけましておめでとうございます。学友会の先生方には幸多き新年をお迎えのことと、お慶び申し上げます。また、旧年中は、学友会時報に多大なるご尽力をいただき、あらためて深く御礼申し上げます。

学友会時報は、名古屋大学医学部の学生と卒業生を結ぶ要として、また大学で研究・診療を行っている先生方と関連病院やそのほかの分野で活躍しておられる方々との情報交換の場として、昨年も様々な記事を掲載してまいりました。1 年間で新たに教授に就任された 4 名の先生方をはじめ、他の施設で教授などに就任された先生方や、新病院長の先生方をほぼ毎号にわたってご紹介することができました。また、中尾昭公名誉教授の米国外科学会名誉会員ならびに、寺崎浩子教授の中日文化賞受賞をご報告させていただくこともできました。時報部を代表し、先生方のご業績に敬意を表するとともに、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

平成最後の 4 ヶ月間となった 1 月から 4 月までは、一昨年に引き続き第 30 回医学会総会に関する記事を掲載させていただきました。平成 31 年 4 月 27 日から 29 日にかけて名古屋国際会議場で開催した学術集会へは、医師、歯科医師、研究者約 21,000 人に、看護師、薬剤師、学生、一般市民を加えた約 37,000 人の方々にご参加いただきました。また、3 月 2 日から 4 月 28 日にかけて名古屋大学博物館で開催した医学史展には約 5,000 人の方々に、さらに 3 月 30 日から 4 月 7 日にかけてポートメッセなごやで開催した市民展示「健康未来 EXPO2019」へは約 30 万人の方々にご参加いただきました。あらためて、学友会の皆様のご支援に感謝いたします。

元号が令和となり、8 月からは創基 150 周年関連記事の掲載を開始いたしました。名古屋大学医学部は明治 4 (1871) 年に名古屋藩の仮病院・仮医学校として発足して、令和 3 (2021) 年に創基 150 周年を迎えます。これにあわせ、時報では創基 150 周年に関連した様々な行事やプロジェクトをお伝えするとともに、各教室や学友会会員の皆様、さらには部活などからのご寄稿を毎号掲載して

まいります。

一方、昨年も学外の方々から様々な寄稿をいただきました。学生や若手医師に向けたメッセージ、書評やエッセイ、学友会支部の報告など、多方面での学友会の皆様の活動を知ることができる楽しい記事となりました。ご寄稿いただきました皆様にあらためて感謝申し上げます。時報では医学のみならず医学以外の方面で活躍されている皆様も積極的にご紹介しております。昨年 9 月からはあらたに「Rising Star」と題し、アートやスポーツなど様々な分野で活躍する学生さんの紹介を始めました。昨年はピアノや陸上競技で世界に挑戦する学生さんの熱意と苦勞を記事にさせていただきました。ぜひ名古屋大医学部の rising star たちを応援していただければと思います。

申すまでもありませんが、学友会時報は学内、学外のあらゆる方々をつなぐ極めて貴重なツールだと思えます。名古屋大学医学部に関わる方々のきずながますます深いものになるよう、皆様のご意見を頂戴しながら、時報部一同、本年も精進してまいりたいと思います。本年もどうぞ指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



准教授就任

附属病院 光学医療診療部 准教授

かわしま ひろき
川嶋 啓揮

〈経歴〉

平成7年3月 名古屋大学医学部 卒業
平成7年5月 半田市立半田病院 研修医
平成9年4月 半田市立半田病院 内科医師
平成11年11月 愛知厚生連渥美病院 内科医員
平成14年4月 名古屋大学医学部 内科学第二講座 研究生
平成15年4月 名古屋大学医学部附属病院 消化器内科 医員
平成19年7月 名古屋大学大学院医学系研究科 消化器疾患病理学 助教
平成21年1月 名古屋大学大学院医学系研究科 消化器内科学 助教
平成26年6月 名古屋大学医学部附属病院 消化器内科 講師
平成31年4月 名古屋大学医学部附属病院 光学医療診療部 部長(兼任)
令和元年10月 名古屋大学医学部附属病院 光学医療診療部 准教授

〈業績〉

1. Kawashima H, Hashimoto S, Ohno E, Ishikawa T, Morishima T, et al. Comparison of 8-mm and 10-mm Diameter Fully-Covered Self-Expandable Metal Stents: A Multicenter Prospective Study in Patients with Distal Malignant Biliary Obstruction. Dig Endosc. 2019;31:439-447
2. Kawashima H, Hirooka Y, Ohno E, Ishikawa T, Miyahara R, et al. Effectiveness of a modified 6-Fr endoscopic nasobiliary drainage catheter for patients with preoperative perihilar cholangiocarcinoma. Endosc Int Open. 2018;6: E1020-E1030
3. Kawashima H, Itoh A, Ohno E, Miyahara R, Ohmiya N, et al. Diagnostic and prognostic value of immunohistochemical expression of S100P and IMP3 in transpapillary biliary forceps biopsy samples of extrahepatic bile duct carcinoma. J Hepatobiliary Pancreat Sci. 2013;20:441-447
4. Kawashima H, Itoh A, Ohno E, Itoh Y, Ebata T, et al. Pre-operative endoscopic nasobiliary drainage in 164 consecutive patients with suspected perihilar cholangiocarcinoma: a retrospective study of efficacy and risk factors related to complications. Ann Surg. 2013;257:121-127
5. Kawashima H, Itoh A, Ohno E, Nakamura M, Miyahara R, et al. Prospective multicenter study to investigate the introduction rate of second-line S-1 in gemcitabine-refractory unresectable pancreatic cancer. Cancer Chemother Pharmacol. 2011;68:677-683

学友会の皆様方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、令和元年10月1日をもって名古屋大学医学部附属病院光学医療診療部の准教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成7年に名古屋大学医学部を卒業し、故郷である半田市立半田病院にて初期研修を開始し、平成8年に旧第二内科(早川哲夫名誉教授)に入局しました。半田病院では肥田野等先生(半田病院名誉院長)はじめ多くのやさしくも厳しい先輩方に御指導いただき、皆で早朝から夜遅くまで働き、しっかり遊ん

でいろいろな経験をさせていただきました。その後、医局人事で渥美病院に異動になりました。典型的な田舎の病院でしたが、住めば都という言葉を実感できる環境であり、ここでも診療科を越えて先輩、後輩に恵まれ様々な疾患(外傷まで)経験させていただきました。

私が大学に帰局した時は、ちょうど内科再編の時期で消化器内科の教授は不在という状況でした。混沌とした時期でしたが、出来たばかりの光学医療診療部の助教授であった後藤秀実先生(名古屋大学名誉教授、名城病院院長)が主宰されていた旧第二内科第6研究室の流れをくむ研究室に配属していただき、中でも自分が一番希望した胆膵グループで臨床業務・研究をさせていただきました。廣岡芳樹先生(藤田医科大学肝胆膵内科教授)のもと、内視鏡的逆行性胆膵管造影(ERCP)の手技を伊藤彰浩先生(にしのほう伊藤内科クリニック院長)に教えていただきました。ERCPは古い手技ではありますが、内視鏡手技の中でいまだに偶発症が最も多い手技であり、一步あやまると重大な偶発症を起してしまう怖い手技です。それをいかに安全かつ効率的に行うか、現在では誰も教えてくれないので自問自答しながら手技の改良に努め、後輩達に指導しています。大学では臨床研究として内視鏡を用いた慢性膵炎の診断と治療、胆管癌の診断とドレナージ、乳頭部腫瘍の内視鏡的治療などに取り組み、中でも後者二つは日本一の症例数を誇っております。このように多くの症例経験をさせていただけるのは二村雄次先生(第一外科 名古屋大学名誉教授)、中尾昭公先生(第二外科 名古屋大学名誉教授)、柳野正人先生(名古屋大学腫瘍外科教授)に帰局以来ご指導いただき、術前診断などを依頼いただいたお陰と感謝しております。また小児外科分野でも安藤久實先生(名古屋大学名誉教授)、内田広夫先生(名古屋大学小児外科教授)に様々な検査を依頼いただき、生後3ヶ月の患児のERCPなども経験させていただいているのも密かな自慢です。今後も多くの症例に恵まれるこの環境を活かし、伝統の画像診断・内視鏡治療手技を中心とした臨床能力を向上させることはもちろんのこと、多数の生体サンプルからえられる遺伝子や細菌叢を用いた診断・治療や、基礎の先生方との協力による新たな診断法・治療法の開発などに邁進していきたいと考えております。

光学医療診療部は2018年1月に新築の中央診療棟Bに移転し、世界に誇れる診療部にしていただきました。後藤先生、廣岡先生が育ててこられた光学医療診療部と消化器内科を藤城光弘先生(名古屋大学消化器内科教授)のもと元気で優秀な後輩達とともに発展させるべく努力していく所存でございます。また、新しい内科専門医制度に対応し、関連病院の先生方と協力し東海地区の内科医を増やす努力もしていきたいと考えています。今後とも学友会の皆様にはご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

准教授就任

運動・形態外科学講座 形成外科学分野

たか なり けい すけ
高成 啓介

〈略歴〉

平成14年 名古屋大学医学部卒業
平成14年～15年 名古屋第一赤十字病院 研修
平成16年 名古屋大学大学院 医学系研究科 機能構築医学(形成外科学) 入学
平成16年 名古屋大学医学部附属病院形成外科 医員
平成20年 名古屋大学大学院 医学系研究科 医学博士 取得
平成21年 名古屋大学医学部附属病院形成外科 病院助教
平成22年 Postdoctoral research fellow, McGowan Institute for Regenerative Medicine, Department of Surgery, University of Pittsburgh
平成24年 Research Assistant Professor, McGowan Institute for Regenerative Medicine, Department of Surgery, University of Pittsburgh
同 7月 名古屋大学医学部附属病院形成外科 病院助教
平成26年 名古屋大学 医学系研究科 形成外科学 講師
令和元年11月 同 准教授

〈業績〉

1. Takanari K, Hashizume R, Hong Y, Amoroso NJ, Yoshizumi T, Gharaibeh B, Yoshida O, Nonaka K, Sato H, Huard J, Wagner WR. Skeletal muscle derived stem cells microintegrated into a biodegradable elastomer for reconstruction of the abdominal wall. *Biomaterials*. 2017 Jan;113:31-41. doi: 10.1016/j.biomaterials.2016.10.029. Epub 2016 Oct 18.
2. Takanari K, Araki Y, Okamoto S, Sato H, Yagi S, Toriyama K, Yokoyama K, Murotani K, Matsui S, Wakabayashi T, Kamei Y. Operative wound-related complications after cranial revascularization surgeries. *J Neurosurg*. 2015 Nov;123(5):1145-50. doi: 10.3171/2014.12.JNS132602. Epub 2015 Jul 3.
3. Takanari K, Hong Y, Hashizume R, Huber A, Amoroso NJ, D'Amore A, Badylak SF, Wagner WR. Abdominal wall reconstruction by a regionally distinct biocomposite of extracellular matrix digest and a biodegradable elastomer. *J Tissue Eng Regen Med*. 2016 Sep;10(9):748-61. doi: 10.1002/term.1834. Epub 2013 Dec 27.
4. Takanari K, Kamei Y, Toriyama K, Yagi S, Torii S. Management of postpneumonectomy empyema using free flap and pedicled flap. *Ann Thorac Surg*. 2010 Jan;89(1):321-3. doi: 10.1016/j.athoracsurg.2009.02.094.
5. Takanari K, Kamei Y, Toriyama K, Yagi S, Torii S. Differences in blood flow volume and vascular resistance between free flaps: assessment in 58 cases. *J Reconstr Microsurg*. 2009 Jan;25(1):39-45. doi: 10.1055/s-0028-1090607. Epub 2008 Oct 21.

学友会の皆様方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、令和元年11月1日付をもちまして名古屋大学大学院医学系研究科運動・形態外科学講座形成外科学の准教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成14年に名古屋大学医学部を卒業し、名古屋第一赤十字病院にて2年間の初期研修を受けました。平成16年に名古屋大学形成外科学に入局と同時に帰局し、鳥居修平（とりいしゅうへい）教授および亀井譲（かめいゆずる）准教授のもと形成外科という大きな分野を学び始めました。名古屋大学形成外科は初代鳥居教授よりマイクロサージャリーが盛んであり、

当時から遊離皮弁移植をはじめとした多くの再建手術を行なっていました。ダイナミックな手技により大きな組織を動かし、癌や外傷などにより欠損した組織を再建するという手術は非常に魅力的でした。またこの時期に再建手術以外にも小児形成外科や一般形成外科を学ぶ機会も得ました。平成16年には名古屋大学医学系研究科（博士課程）へも入学しており、前述のような様々な臨床を経験しながら、鳥居教授、亀井准教授より与えられたテーマである遊離皮弁の血流についての研究を、臨床データをもとに行いました。この研究から、移植組織毎に内部を流れる血流に対する抵抗が異なることを発見し、博士号を取得することができました。平成21年に亀井譲先生が教授に就任された後も引き続き名古屋大学で研鑽を積んでおりましたが、縁あって平成22年5月から平成24年6月までの2年間、留学する機会を得ました。留学先は米国ペンシルバニア州ピッツバーグ大学の McGowan 再生医療研究所というところで、William R. Wagner 教授のもと人工材料を用いた筋肉組織再生の研究を開始しました。素材の種類や内部構造の違い、細胞の有無などにより変化する生体応答についての研究を行い、特に人工物に対する免疫系の細胞の反応について調査を行いました。各国から集まった同僚の研究者と discussion しながら進める研究は非常に刺激的であり、周囲に恵まれたこともあって2本の主著と6本の共著を出すことができ、非常に充実した研究生活を送ることができました。

平成24年7月に帰国後、名古屋大学形成外科学教室で亀井教授、鳥山和宏（とりやまかずひろ）准教授（現名古屋市立大学形成外科教授）のご指導のもと改めて臨床の研鑽を積み、主にマイクロサージャリーを用いた遊離皮弁移植の技術を学びました。特に頭頸部外科領域では再建手術を行っても機能や整容性を完全に回復することは未だ困難であり、どのような再建を行えば患者様の生活に貢献できるかということを考えながら手術の最適化を行うことに注力しており、最近ではシミュレーションやナビゲーションなどのコンピューター技術なども用いております。

これまで学んできたことから基礎研究及び後進の育成にも力を入れました。テーマの一つとして学位研究である組織の血流及び抵抗についての研究をさらに進めており、一連の研究により脂肪と筋肉では血流の抵抗が異なること、また同じ血管茎を持つ組織では組織の体積によって抵抗値が異なることなどを報告しました。また、形成外科領域における難治性疾患の一つであるケロイドの研究も行っており、留学中に学んだ技術を生かして多光子顕微鏡を用いたコラーゲン構造の解析についても取り組んでおります。

これまで多くの先生方からご指導、ご支援をいただきましたことに、この場を借りて深謝申し上げます。今後も形成外科学の発展に少しでも貢献できるように臨床・基礎研究の両方で全力を尽くして参りたいと考えております。学友会の皆様には今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い致します。

150周年記念記事

創基150周年によせて

JR 東海 名古屋セントラル病院 院長 中尾 昭公

1973年(昭和48年)に卒業し、関連病院で7年余の修練後、第二外科(現 消化器外科)に帰局した。途中、米国留学があったものの31年間を医局で過ごすこととなった。消化器外科教授を2011年(平成23年)に定年より少し早く退任し、現在のJR 東海 名古屋セントラル病院で院長として、また現役外科医として勤務している。

私の教授時代は大学法人化を経験し、また大学院重点化の名のもと、ナンバー内科は臓器別に再編され、外科もナンバー外科から名称が変更されてきた。そして最近では臓器別再編に向かっていていると聞く。私はナンバー内科、ナンバー外科の消滅後は外科の正確な歴史を辿ることは困難だろうと考えていた。2010年(平成22年)、第110回日本外科学会の学術集会を名古屋で開催させていただいたが、教員総動員で「第二外科140年史」の編纂に取り組んだ。そして「名古屋大学医学部第二外科140年史」を刊行することができた。また、その時の資料や作成したパネルを学会会場で公開した。学会期間中には市民公開特別企画として「名古屋の外科140年史」と銘打ってパネリストに講演していただいた。私の最終講義は「第二外科140年の歴史を旅して」と題して講演させていただいた。2011年の第102回学友大会では東日本大震災のこともあり、外部より特別講演の演者を招聘せず、大会委員長であった私が自ら「名古屋の外科140年史」と題して講演することとなった。また「名古屋の外科140年史」のパネルも学友の皆様へ披露することができた。名古屋大学の外科がヨンゲハンス、ローレツ、後藤新平の時代より第一外科、第二外科に分かれて現在に至るまでの歴史を勉強する機会に恵まれたことは大変な喜びであった。

2002年から4年間を時報部長として学生とともに学友時報の編集に携わった。時報部長の名を利用して学友の皆様より寄付を募った。それはJR 鶴舞駅北口から名工大に至る道路横のつつじの植え込みのなかに桜の苗木を植樹し、桜並木を完成させたいと思っていたからである。そして2002年から2005年にかけて26本を植樹し完成した(写真1)。現在では大きく成長し、素晴らしい桜並木(写真2)となっており、その桜の根元には寄贈していただいた皆様の団体名が石碑に刻まれている。かつて名大病院内には素晴らしい桜の古木が多くあったが、再開発ですべて切り倒され寂しい思いをしていたが、新たな桜の名所となっており嬉しい限りである。毎年、桜の季節になると名大病院の桜並木の下を歩くのを楽しみにしている。



写真1 桜並木完成当時(2005年)



写真2 現在の桜並木(2019年)

150周年記念記事

解剖学第二講座／機能組織学と創起150周年

機能組織学 教授 木山 博資

明治6年(1873)医学講習所が西本願寺別院に設けられ、新たに設置された解剖局でアメリカ人医師ヨンゲハンスにより初めて人体解剖が行われた。解剖学教室の源はここに求められる。その後明治9年に公立医学所、明治14年に愛知医学校となり、この時に奈良坂源一郎先生が東京大学より教諭として着任し、多くの教科書の作成とともに教育体制を構築し、名古屋大学の解剖学教育の基盤が確立した。明治36年(1903)に2教諭による体制ができ、その後愛知県立医学専門学校、愛知医科大学、名古屋医科大学を経て、昭和14年(1939)に名古屋帝国大学設置に伴い解剖学が3講座制となり、解剖学第二講座としての歴史が始まった。平成12年(2000)大学院重点化に伴い、解剖学第二講座は機能形態学大講座の一分野として「機能組織学」と改称され現在に至っている。

昭和14年名古屋帝国大学設置以来現在までの解剖学第二講座の歴代教授は、戸近太郎(1933-1960)、原淳(1960-1971)、空席(1971-1981)、星野洸(1981-1996)、杉浦康夫(1996-2010)、木山博資(2011-)である。各教授の主たる研究領域としては、戸近太郎教授のもとでは内分泌腺の組織発生学的研究がなされ、その流れを受けて原淳教授は上皮小体を中心に研究を展開した。星野洸(たけし)教授のもとでは免疫系細胞や結合組織の超微細構造の研究がなされた。杉浦康夫教授は疼痛メカニズムの研究を進め、木山博資は神経再生や変性の分子メカニズムの研究に取り組んでいる。名古屋大学解剖学教室が主催した日本解剖学会には、昭和35年に戸近太郎教授(第二解剖)のもとで開催された第65回日本解剖学会、昭和42年に山田和麻呂教授(第三解剖)が会頭として主催された第72回日本解剖学会がある。また、令和3年3月に第126回日本解剖学会を木山博資(第二解剖)が会頭として54年ぶりに名古屋で開催を予定している。

また、大会以外の本教室の貢献として、昭和28年に上梓された戸近太郎教授著「組織学」(南山堂)があげられる。本教室の講義実習から生まれた名著であり、その後改訂が進み戸近太郎教授の直弟

子の伊藤隆教授(北海道大学)に引き継がれ、現在でも組織学の教科書として使われている。また、社会貢献としては、解剖学第二／機能組織学は人体解剖トレーニングセミナーを昭和56年(1981)から40年の長きに亘って開催している。全国の解剖系教員の肉眼解剖実習の研修の場として、夏休みに1週間かけて実習研修を行なっている。令和元年までに受講生は994名に及び(59国公立大学、68私立大学、2海外大学などより参加)、本セミナーが医学医療の教育の質向上に果たした役割は大変大きい。長年の解剖学教育への貢献が評価され、平成26年には、日本篤志献体協会・篤志解剖全国連合会より篤志献体賞が授与された。また、日本解剖学会からその活動が高く評価され、継続的な後援を受けている。



2017年1月。杉浦康夫名誉教授の瑞宝中綬章受章お祝いの会(同門会)。星野洸第3代教授(前列右から2番目)、杉浦康夫第4代教授(前列右から4番目)、木山博資第5代教授(前列右から3番目)

150周年記念記事

神経疾患病態統御部門

神経遺伝情報学 教授 大野 欽司

名古屋大学の多くの講座は特定の教育研究診療のミッションを担い、その領域における優れた教育研究診療実績を綿々と積み重ねるとともに新たな業績を加えつつ発展してきました。一方、私が所属する「神経遺伝情報学分野」の教育ミッションと研究テーマは教授の代替わりとともに大きく変わります。私の講座の過去の教授達はそれぞれ優れた研究業績を上げられてきておりますが、私とは専門領域が大きく異なり過去の業績を正確にご紹介申し上げる自信がございません。126代令和天皇に代表されますように古代から歴史が引き継がれてきた日本と、武力により王朝が代わり歴史が分断される中国のような違いを感じます。私の講座は、創基150周年事業として教室の歴史を紹介することが相応しくない教室ですが、講座の経緯と現在の活動を紹介させていただきます。

1983年度に、無菌動物・癌・医真菌の三研究部門が病態制御研究施設へと統合されました。「無菌動物部門」が「生体防御学分野」に改組され、1991年に吉開泰信教授が着任されました。2002年、吉開教授の九州大学生体防御医学研究所へのご転出に伴い、「生体防御学分野」を新たに神経疾患の病態・治療研究を行う分野に改組することとなり、2004年9月に私が着任しました。当時は大学院重点化が開始をされた時代で教室名を変更するにあたり他大学にないユニークな教室名をつけることを求められました。私は神経内科学をバックグラウンドにしており着任時には遺伝学とバイオインフォマティクスの研究手法を用いておりましたので「神経遺伝情報学分野」としました。

「神経遺伝情報学分野」では、主に4つの研究テーマに取り組んでおります。はじめに、神経筋接合部信号伝達の正常分子構築解明・分子病態解明・病態制御研究です。対象疾患は先天性筋無力症候群です。第2の研究テーマは、正常ならびに病態におけるRNA代謝・RNA転写研究です。網羅的RNA結合タンパク質解析手法とバイオインフォマティクス手法の開発と応用を行っています。第3の研究テーマはパーキンソン病の腸内細菌叢研究です。

パーキンソン病が腸管神経叢発症であることが明らかになりつつあり、腸内細菌叢にその原因を求めています。第4の研究テーマは分子水素と超微弱磁場の分子作用機構の解明研究です。驚くべきことにいずれも我々の細胞内に標的分子が存在しました。世間で怪しいと蔑まれる科学に対して最先端の研究手法を適用し真実の解明に取り組むことができるのは特定のミッションを持たない講座の強みであると思っております。



図説：当教室の過去と現在のメンバーにより
構成したモザイク画像

新春後記

新年明けましておめでとうございます。今年度は医学部バドミントン部で女子主将として、個人的には怪我もありながらも全体を率いる充実した日々を過ごしております。また兼部している医学部混声合唱団では、幹部としての定期演奏会を新年2/2に控え、ますます練習に熱が入る毎日です。

さて、3年生後期の基礎医学セミナーでは久場教授の生理学の研究室に配属させていただいています。担当の江川先生には1年生の時から熱心にご指導いただき、心から感謝しております。研究室では常に意欲的で多忙な活動が続いておりますが、中でも久場教授は私達によく話しかけてくださいます。また、研究室の先輩や同級生、研究室の皆さんはとても優しく、よい研究室にご縁がありましたことを幸せに思います。まずは年度末3月の研究発表会に向けて、ますます精進していきたいと思っております。

どうぞ今年もよろしくお願い致します。(石丸 怜奈)

新年明けましておめでとうございます。昨年は、時報部に入部したばかりで多くの先生方、先輩方にご大変お世話になりました。またこの秋より私は、所属しているラグビー部に最高幹部となり、チームを牽引していくべき立場となりました。チーム方針を考える上で苦悩に悩まされる一方で、これまでにないやりがいと充実さを感じております。今年度の西医体でいい結果をご報告できるよう日々精進して参ります。本年度もどうぞよろしくお願い致します。(加藤康太郎)

新年明けましておめでとうございます。昨年は時報部に入部して1年目ということもあり、多くの先生方、先輩方に多くのことを教えていただき大変お世話になりました。秋からはテニス部主将を務めさせていただいており、責任ある仕事にやりがいを感じています。今年から学校生活も折り返しを迎えます。文武ともに大成できるよう今年1年精一杯努力していきたいと思っております。今年もよろしくお願い致します。

(関沢悠紀彦)

新年明けましておめでとうございます。皆様いかにお過ごしでしょうか。まだ寒さが厳しい日が続きますが、もうすぐ新しい季節もやって来ます。そして季節の移り変わりとともに、私たちが新たな学年へと進みます。ふとこの大学での3年間に思いをやりと、あっという間に過ぎ去ってしまったその毎日とはとても充実したものでありました。時報部をはじめとして、たくさんの素晴らしい方々とお会いし、私自身成長させていただいていることに感謝しています。4年生になるとCBTやポリクリが始まっていきます。入学当初は遙か先の未来のことのように思っていたものがだんだんと目の前にやってきている現実に対して、正直焦りや不安がないとは言えません。しかし、これからの学生生活を無為に過ごさないために目の前の課題に全力で取り組み、日々精進して参りたいと思っております。どうか今年も宜しく願いいたします。(中野 阿美)

本時報に対するご意見、ご感想、情報等は jiho@hotmail.co.jp までお寄せ下さい。

部 長	勝野 雅央	6年	小西なつの	佐々木和磨	杉浦健太郎	丹下恵里花
委 員	橋詰 淳	5年	チーフ	石井 佐彩	栗田祥太郎	松尾聡一郎
	鈴木 葵	4年		石田 萌	東島 弘樹	山邊 晃
学友会事務局	富田 明子	3年		石丸 怜奈	加藤康太郎	関沢悠紀彦
	藤本眞智子					中野 阿美

発 行 所 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町 65
名大医学部学友会
編集発行人 学友会内 勝野 雅央
印 刷 所 名古屋市千種区不老町 1
名古屋大学消費生活協同組合印刷部

購読料 (年7,000円 会費を含む) 毎月22日発行
学友会 振替口座 (00880 - 7 - 3838)
電 話 (052) 744-2512 (直通)
F A X (052) 741-7676